

# 秋草鶉図屏風



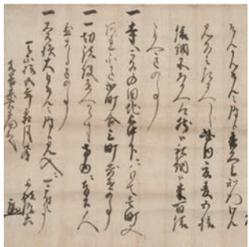
史料紹介「立置寺内之事」(不破源六定) 天正十五年(1587)十一月二十九日付 岡村弘子

「立て置く寺内之事」という標題はあまり例のないのだが、内容は織田信長の次男・信雄の尾張支配期に発給された行政文書である。 差出は西美濃の領主であった不破広綱(？〜1600)。広綱は信雄の重臣であり、小牧・長久手の戦い(天正12年)で秀吉が水攻めした竹鼻城主として名を知られる。宛所の水谷甚右衛門は、不破広綱配下の在地領主で、当時は文中にある祐久村を拠点としていた。

内容は、「寺内」とした村に課せられた年貢米の徴収方法について定めたもの。通常、寺内とは一般には寺の境内、又は「寺内町」と称され、おもに浄土真宗の寺を中心とした町場のことを指す。寺名はないが、「寺内」の表記や本文にあ

## 清須に「枀」あり

一史料紹介「立置寺内之事」(不破源六定) 天正十五年(1587)十一月二十九日付



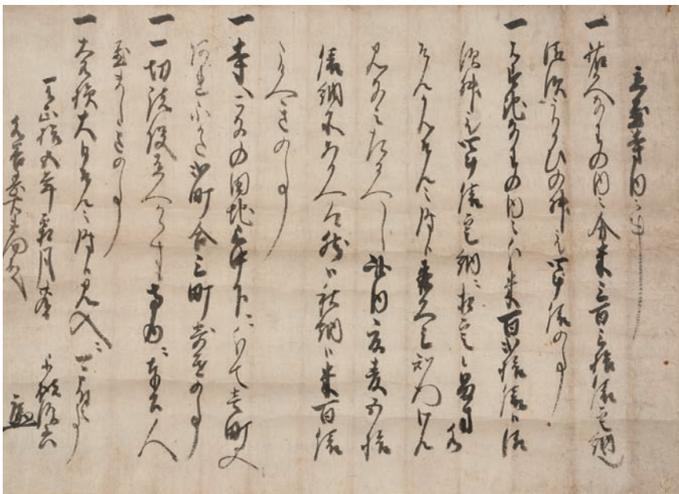
## 奥村石蘭 群鴉図襖



名古屋博物館だより 233号 令和4年(2022)4月1日 年2回(10月、4月)発行 編集・発行/名古屋博物館 〒467-0806 名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1 TEL 052-853-2655 FAX 052-853-3636 http://www.museum.city.nagoya.jp

古紙を含む再生紙使用

ていたが、具体的な資料が乏しく、その様相は不明であった。今回本状により、尾張北西部で具体的に清須枀によって年貢取納が行われていることが明らかになったことは、地域経済が清須を中心に成り立っていたことの明証といえる。ただし本状の対象地域が清須と近接した地域のため、清須枀の通用圏がどこまで広がっていたのかについては、尾張国内での事例が出てくるのを待って慎重に検討すべきだろう。また、清須枀の容量・枀割との換算比率も、俵数表記のみのため計算できず、今後の課題である。



立置寺内事(不破源六定) 縦 28.5cm 横 42.9cm 館蔵

立置寺内之事、一祐久なわの内之分米三百三拾俵定納也、清須うりかひの舛にて四斗俵の事、一はす池なわの内之分米百貳拾俵ハ、清須舛にて四斗俵定納ニ相定候、畠方水そんなんそんなん之時ヨリ、森久三知行けん見なミたるへし、此内、夏麦五拾俵納所あるへく候、然ハ秋納ハ米百俵たるへきの事、一寺へこの田地上中下二分て壹町入、一あれふかた貳町、合三町寄進の事、一切諸役あるへからず、寺内ニ奉公人置ましきの事、一大水損・大日そんなん之時ハ、見入ニ可申付之事、一天正拾五年霜月廿九日 不破源六(広綱) (花押) 水谷甚右衛門尉殿 (大意) 「寺内」の設定について(年貢徴収について) 一祐久村の収穫のうち年貢三百三十俵取めること。 一清須売買いの舛で四斗俵である。 一蓮池村の収穫のうち年貢百貳十俵は、清須枀で計った四斗俵で納めること。畠の収穫は、 一水害や日照りの時により、森久三の見分に従うこと。 このうち夏麦は五十俵納めること。 この場合、秋は米百俵を納めること。 一寺へは小規模な田地で上中下にて等級分けした壹町分と、荒れて不作だった土地二町、合せて三町分寄進すること。 一寺へのこれ以外の課役は免除である。寺内には奉公人は立ち入り禁止である。 一大水害・大旱魃の時は、収穫量に応じて課税すること。 天正拾五年霜月廿九日 不破源六 水谷甚右衛門尉殿



関連地図

天正15年11月という時期も興味深い。天正13年11月には当地域を大地震が襲い(天正の大地震)、清須城も大きな被害を受けた。また翌天正14年には木曾川の氾濫による洪水が起こつたとされ、本状に見える祐久村・蓮池村をはじめとする木曾川沿岸地域は壊滅的な被害を受けたと想定される。まさにこの翌年の収穫が本状での徴収対象であろう。文中に「水損」「干損」のみならず「大水損」「大日損」といった「激甚災害」時の対応について明記しているのは、このような時勢が背景にあるとみられる。 最後に、意外だが不破広綱の発給文書は、当状を除くこれまでに通(立政寺文書)しか確認されていない。信雄による尾張支配の様相を読み解くうえで、広綱をはじめとする信雄の股肱の家臣による発給文書の情報は貴重である。今後検討を続けていきたい。

謝辞 不破広綱・水谷甚右衛門については後藤昌美氏(岐阜県羽島市)より有益なご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

## 奥村石蘭 群鴉図襖

津田 卓子

雄大に飛翔する25羽の鴉を、襖八面にわたって墨で描き、金砂子を散らして霞を表す。(図版1) 画面右端には次のように記される(図版2)。

「戊寅冬日寫於 抱海樓中」「石蘭」朱文方印「庸」

令和4年(2022)2月に寄贈を受けたものであるが、作品と空間の密接な関係を思い知らされる資料であった。

どこにあったのか 「抱海樓」とは、宮の渡しに面した熱田神戸町の旅籠屋、伊勢久(以下、抱海樓)のことである。明治4年(1871)刊行『新聞附録名越各業独案内』には「同所(熱田神戸町) 諸国御定宿 伊勢屋久右エ門」「同所(熱田神戸町) 抱海樓 伊勢屋久右エ門」との記載がある。建物自体は昭和59年(1984)に名古屋有形文化財に指定され、丹羽家住宅として現地に残る。本作は同宅にあったものである。

だれがいつ描いたのか

先述した落款は、幕末から明治にかけて名古屋で活動した画家、奥村石蘭のもの。石蘭は天保5年(1834)4月25日、名古屋に生まれた。名は庸、字は可均、通称は源吾、大助。号として他に知芳園、楓斎、庸堂主人がある。名古屋の野村玉溪、京の横山清暉に学んだ四条派の画家で、明治28年(1895)2月7日に没している。つまり本作は、「戊寅冬日」すなわち明治11年(1878)の冬に、奥村石蘭が抱海樓のために描いた襖絵である。



図版1 奥村石蘭 群鴉図襖 館蔵



図版2 落款 (次ページへ)

石蘭は、まず薄墨で鴉の体躯を下塗りした上に、墨を塗り重ねることで翼や尾羽根を表現する。近景の個体には濃墨を、遠景の個体には薄墨を施すといったように、それぞれに濃淡をつけて画面に変化を与え、群れのなかでの空間の広がりを出す。

なぜ鴉なのか

飛翔する鴉というのは、特段珍しい画題ではないが、抱海樓にあつたとなると俄然意味を持つてくる。

かつて抱海樓のすぐ東側―現在の熱田区内田町辺り―に、海にせり出す形で東浜御殿が威容をそびやかしていた。元和4年(1618)頃、尾張藩による接待所として建造され、御茶屋御殿とも称された館である(注1)。

さて、東花元成『名護屋見物 四編の綴足』前編上(文化12年(1815)刊行)には「御茶屋烏表を通る はや帰りの客」との一節が載る。神戸町や伝馬町が遊興地であったこと、そして「明烏」の語があるように、鴉の鳴き声が夜明けを告げ恋人たちを引き離す象徴になっていることを念頭に置

くと、表通りを行き交う朝帰りの遊客の話し声と鴉の鳴き声を重ねつつ、そのざわめきを夢うつつのなか耳にする情景が浮かんでくる。

ところで鴉は秋から冬の夕暮れに、群れとなつてねぐらに帰る習性がある。実際のところ、東浜御殿の敷地内には鴉のねぐらがあったという。

嘉永3年（1850）刊の小田切春江『名区小景』三編上では、「御茶屋群鴉　俗に御浜御殿ともいふ」と題し、東浜御殿周辺と鴉を詠み込んだ詩歌を掲載し、城郭のような石垣を擁する御殿と船の上空を、無数の鴉が飛び交う挿絵を加える（図版4）。さらに同書改刻版では「宮宿の海浜にあり。此所の松林に群鴉（からす）、ねぐらをあらそひ、明を告（つぐ）る声かまびすしく、旅人の夢もやぶりつべし。」との解説が入る。

これにより、文学の世界でも現実としても東浜御殿界限に鴉のイメージが定着していたことが明らかとなる。明治11年ともなると、すでに御殿自体は解体されていた可能性が高いが（注2）、石蘭はこの土地の文脈を踏まえて画題を選択しているのだ。

その上で襖全体の画面構成に目を向けてみよう。本作はすでに建物から外されて久しく、どの座敷にあつたのは判然としないが、八面であることを考え合わせると、抱海楼の海岸側を望む部屋のうち上段の間に嵌められていた可能性が高い。そのように室内に配置したとき、横並びで八面に対したときよりも格段に画家の意図が理解される（図版3）。右端の中央辺りから飛び出した鴉の群れは、上下に

## 秋草鴉図屏風

藤田 紗樹

**薄野**に遊ぶ**鴉**を描いた「秋草鴉図屏風」（図版1・2）は、伊達家の旧蔵品で昭和56年（1981）に名古屋市博物館の所蔵となった。たびたび展覧会にも出品され、美術全集などでも取り上げられてきた屏風の名品である。惜しむらくは伝来の過程で各隻の第六扇が入れ替わっており、本来であれば穂のついた薄があるのは左隻のみで、右隻は夏、左隻は秋と季節を描き分けていたようだ。

「秋草鴉図屏風」の画題や美術史上の位置づけについては、参考文献に挙げた竹内美砂子氏の論考で詳細な検討が加えられているので、こちらを一読いただきたい。今回本作を取り上げたのは、絵師について改めて考えてみたいと思ったからである。

本作には落款や印章はなく、作者は不明であるが、鴉図を得意とした近世やまと絵の高手・土佐光起（1617〜91）やその周辺の土佐派の絵師の作とおむね考えられてきた。近年は光起の代表作として本作を紹介する著書や図録もある。しかし、本作と光起の鴉の描写には異なる点がある。

光起の鴉は、中国宋代の院体画（宮廷画家による絵画）に倣ったもので、院体画の鴉図の代表作としては、根津美術館所蔵の伝李安忠「鴉図」がある。伝李安忠「鴉図」と光起筆「鴉図」（アムステルダム美術館蔵）（図版3）を比較すると、精緻な羽描きや、脚を淡い橙の絵具で着色した上に胡粉で凹凸を表す点などが共通し、光起はよく院体画の鴉図を学んでいることがわかる。一方本作の鴉は（図版4）、羽の一枚一枚の輪郭を墨線であちどり、脚は実際の鴉の姿に近い橙色で着色し、凹凸は墨線で表現する。これは光起や伝李安忠「鴉図」とは明らかに異なる。

また、「秋草鴉図屏風」では雛鳥の羽は親と同じ茶色で描かれるが、光起の鴉の雛を描いた作品では、雛の羽は柔らかな黄味を帯びた色で描かれている。その表現は光起の長男**光成**に継承されていることから、土佐派の正系や近い距離による絵師によって本作の鴉が描かれたとは考えにくい。光起と同時代に活躍した狩野探幽（1602〜74）や清原雪信（?〜1680）にも鴉図の作例があり、この時期には土佐派に限らずとも鴉がある程度画題として定着していたと考えられる。

なによりも、本作の画面の印象を決定づける薄の鬱着とした描写は、現存の光起の作品に本作と通ずる表現を見出すことができない。以上のことから、本作が光起の筆とは認め難いことを改めて強調しておきたい。

一旦光起から離れて、薄という画題に注目すると、薄を画面の主題として描く作品としては、長谷川等伯（1539〜1610）による慶長7年（1602）成立の「萩荘図屏風」（相国寺蔵）や、



図版1 秋草鴉図屏風 右隻 館蔵



図版2 秋草鴉図屏風 左隻 館蔵



図版3 現丹羽家住宅にて



図版5 岡田閑林 鷺鳥図 館蔵

分かれつつ、室の一隅で上昇し、そして緩やかに左端中央に向かって下降する。床の間を背にして座すと、まるで鴉の一群が室内を廻り、そのまま窓の外へと向かっていくようだ。そしてその先には、かつて東浜御殿があった光景が広がっている。

室内の設えである襖絵は、基本的にその場で鑑賞することを画家は想定しているが、とりわけ本作においては画題選択と画面構成の両面からみて、場所の固有性が濃厚だということがお分かりいただけるだろう。

これから

丹羽家住宅には民間活用の道が開いていると聞く。当館の所蔵となった襖絵自体はこれ以上劣化が進まないよう修復を施す必要があるにせよ）、今後、公開する機会があるだろう。しかしやはり本作の性格を考えると、できれば石蘭が意図した「鴉の間」の再現空間を見てみたいと思うのである。



図版4 「名区小景」三編上より 館蔵



図版3 土佐光起 鴉図 部分 アムステルダム美術館蔵

長谷川派による「秋草図屏風」（メトロポリタン美術館蔵）などが挙げられる。また、高い密度で薄を描く作品としては、武蔵野の原野を描いた「武蔵野図屏風」の一群がある。これだけの大作であるので、桃山から近世初期にかけて活躍した長谷川派など、名のある絵師の作に帰したくなるが、長谷川派が描く抒情性に満ちた草花の描写は、本作に対峙した時に第一に受けるであろう迫り来るような薄の力強さとは距離がある。こうした画面の大部分を覆う草花表現は、絵師の問題というよりも同時代的な流行と捉えておきたい。

むしろ「秋草鴉図屏風」の薄の描写は、「武蔵野図屏風」の中の一部の作品に近似するものが認められる。すでに仲町啓子氏によって指摘されているが、画面下端から丈高の草をのぞかせ、叢を前後にずらして奥行きを出す構図は「武蔵野図屏風」の一部の作品に見受けられる。「武蔵野図屏風」は20点近くの作例が残りながら、長谷川派とされる作品が一点あるのみでそのほかの作品の筆者は不明であり、画面に描かれるモチーフの選択や完成度にも差があるが、メトロポリタン美術館所蔵の「武蔵野図屏風」（図版5）などの、やや平板な印象を受ける作品の薄の描写は「秋草鴉図屏風」に通じるものがある。

さらには、「武蔵野図屏風」が「武蔵野は月の入るべき山もなし草より出でて草にこそ入れ」の俗謡的和歌に代表される、歌枕としての「武蔵野」のイメージを反映しているように、「秋草鴉図屏風」にも和歌の伝統的なイメージが重ねられていると考えられる。鴉は草深い荒れた里の情景と組み合わせられ、和歌でくり返し詠まれてきた。

「武蔵野図屏風」自体が未だその作者や享受層について不明な部分が多い作品であり、両作品を安直に結びつけることは避けたいが、あくまで「秋草鴉図屏風」を考える一つの材料として両作品の近似性を主張しておきたい。

ここまで縷々述べてきたように「秋草鴉図屏風」の造形表現は雑食的であり、なかなかその制作背景に迫り得ないが、本作が今後人もびとを魅了し、議論が続けられる名品であることは疑いない。



図版5 武蔵野図屏風 メトロポリタン美術館蔵

竹内美砂子「秋草鴉図屏風小考」（名古屋市博物館研究紀要 12巻、1988年、1〜11頁）

仲町啓子「武蔵野図の系譜」（小林忠・村重寧編「花鳥画の世界5 瀟洒な装飾美―江戸初期の花鳥」学研学智社、1981年、124〜130頁）